J-STAGE NEWS
J-STAGEニュース
No. 33
電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関紙
ISSN 1346-1990
2012年9月30日発行
独立行政法人
科学技術振興機構

今号の記事：

- わが国の電子化推進の必要性と J-STAGE の運営について
- J-STAGE Readers' Voice! ご利用者インタビュー
  株式会社 IHI 技術開発本部 管理部 技術情報センター 様
- シリーズ学会訪問「日本繁殖生物学会」様
- ご存知ですか!? JaLC DOI この秋から付与開始！
- インパクトファクター2011　ほか

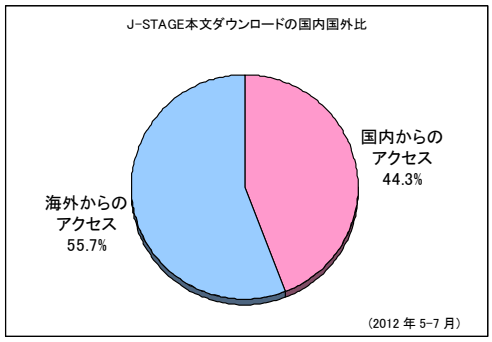
わが国の電子化推進の必要性とJ-STAGEの運営について

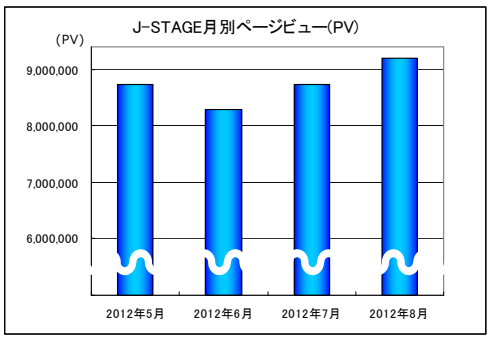
J-STAGE はこの 5 月に新バージョン・J-STAGE3 の運用を開始し、データベース形式の国際標準（XML）への移行、剽窃検知サービス CrossCheck の導入等を行いました。また 8 月には公開誌数（予稿集等を含む自力公開誌数）が 1,000 誌となり、閲覧数・PDF ダウンロード数も順調に増えています。J-STAGE に登載されているジャーナルの多くは無償で本文まで閲覧することができます。アクセスの約半数は海外からのもので、アメリカ、中国、欧州やインドなど 200 以上の国から閲覧されています。また、最近では研究者の方のみでなく学生や一般の方々からの問い合わせも多く、アクセスも増えてきています。しかしながら、わが国の学術雑誌の電子化率はいまだ6割程度と欧米や中国に比して遅れを取っており、さらなる電子化の促進が望まれます。

平成 24 年 7 月に、「科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会」から発表された「学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について」の提言には、学術振興の基礎となる学術情報基盤の整備の必要性、人文・社会科学系の電子ジャーナル化の遅れ、オープンアクセス化の取り組みの必要性が指摘されています。

また、学術情報基盤の強化に当たっては、日本学術振興会（JSPS）、科学技術振興機構（JST）、国立情報学研究所（NII）、国立国会図書館（NDL）による支援のための環境整備が重要であり、各機関の連携および役割分担が必要とされています。

さらに、学術情報の流通・発信力強化に関わる事業実施機関の一つとして JST の J-STAGE 事業に関し「我が国のジャーナルのさらなる電子化促進や諸外国へのプラットフォームの普及なども重要な課題であり、今後も関係機関や日本学術会議などと連携を密にし、我が国発の電子ジャーナルプラットフォームとして、取り組みの充実が望まれる」と J-STAGE3 による電子ジャーナル流通機能の高度化が謳われています。





これを受けて、J-STAGE ではより一層の業務運営の効率化・合理化を図りつつ、学協会のみなさまのご協力のもとにさらなる電子化の推進と登載誌の拡大、閲覧機能の充実化を図っていきます。

J-STAGE の流通・発信力強化に向けて、学協会や閲覧者（企業や図書館、大学など）の方々を対象にご要望やご意見を伺い、わが国の学術情報発信力の一層の強化に取り組んで参りますので今後ともよろしくご支援をお願い申し上げます。

J-STAGE Readers' Voice! ご利用者インタビュー

～株式会社 IHI 技術開発本部 管理部 技術情報センター様～

平成 24 年 8 月 29 日、株式会社 IHI 技術開発本部 管理部 技術情報センター様と意見交換を行いました。株式会社 IHI（アイ・エイチ・アイ、旧社名：石川島播磨重工業株式会社）は、そのルーツを江戸時代にまで遡る、日本を代表する重工業メーカーです。今回は閲覧機能のご利用者側から見た J-STAGE についてご意見を伺いました。一部ですが以下にご紹介します。

ーまず、貴センターの概要についてご紹介お願いします。

技術図書や雑誌、社内技術資料の保管・貸し出しや技報の発行、社内技術の発表会、J-STAGE を含む社外の電子ジャーナルの窓口を担っています。技術系情報は横浜事業所の技術情報センターで扱っており 3 名体制、経営情報などは本社（豊洲）の情報センターが担当しています。社外技術情報検索は、研究員や設計員がインターネットから直接情報にアクセスするという利用スタイルが多いのですが、技術情報センターへ検索を依頼されるケースも少なくありません。

ーJ-STAGE をどのような形態でご利用になっていますか。

株式会社 IHI　技術開発本部
管理部　技術情報センター
主査 三島 宏行 様、森谷 奈保子 様

研究員や設計員が直接、利用しています。また、技術情報センターで複写依頼を受け、（旧 Journal@rchive を含む）J-STAGE で検索して、全文閲覧できるタイトルは複写依頼者へ情報提供しています。フリーで全文情報が得られることの多い J-STAGE は非常に有用です。

ただ正直なところ、J-STAGE の存在を知らないという利用者がまだ多いのが現状です。また、J-STAGE のサイトであることに気がつかない利用者もいるようです。「何か便利な調査方法はないか」といった問合せがあった時に J-STAGE を案内していますが、具体的な使い方であるとか、こう使うと便利、などの内容でもっと積極的に PR 活動を行っていきたいと思います。特に若い研究者は、やはりまず Google、Google Scholar から検索するケースがほとんどのようです。しかしこうした検索エンジンは当然ノイズも多いので、論文情報を探す場合に J-STAGE のようなサイトから検索するメリットは大きいと思います。

ーユーザからの J-STAGE に対する感想、反響、要望についてはいかがでしょうか。

技術情報の発行機関には、論文だけでなく、レポートや記事も、あるいは会議録や予稿集についても積極的に掲載していただきたいです。また、できれば企業の技報もあるとありがたいです。というのも、技術動向などを調べる際には比較的大きな概念から絞り込んでゆくわけですが、その際、実は論文以外の記事も非常に参考になります。技報に載せる記事は学会誌には掲載されないことも多いので、J-STAGE にあるとあちこち探さずに済むので助かります。また、電子版の公開と冊子版の発行にタイムラグがあるジャーナルがありますが、できれば、電子ジャーナルのメリットを生かして早く、かつフリーで公開していただけるとありがたいと思います。

さらに、過去分がアーカイブ的に掲載されることも重要と考えます。最新の研究であってもその背景には長い歴史があります。たとえば最近のトレンドである風力発電なども、古くは風車の時代から化石燃料の価格など周りの環境によって研究の勢いに波があり、そのトレンドを調べることができれば大きなメリットになります。紙媒体資料の保存は、保管場所や紙の老朽などで難しくなっています。これらを一気に解決できる電子保存の観点からも過去分を含め J-STAGE へ登載の拡大を検討していただきたいと思います。

J-STAGE 全体としては、近接した分野の網羅性を充実していただきたい。たとえば化学系の主要論文誌が掲載されていても、熱関連のジャーナルが少ない、というようなことがあります。

ー最後に一言お願いします。

なんと言っても、企業内の研究者における J-STAGE の認知度をもっと向上させるべきではないでしょうか。JST（J-STAGE）と学会とユーザ（企業等）の3者が連携して積極的な PR をしていければ良いと思います。

ーありがとうございました。J-STAGE では今後も企業や図書館の方々を訪問させていただき、J-STAGE の情報発信機能の拡充や登載コンテンツの充実、登載誌のプロモーションについて学協会様と共に考えてまいりたいと思います。

〔シリーズ学会訪問〕～J-STAGE 参加学協会の声～

［日本繁殖生物学会様］

今回は、日本繁殖生物学会の『Journal of Reproduction and Development』誌編集委員長・長嶋様（明治大学教授）と副委員長・大蔵様（名古屋大学教授）を訪問させていただき、お話を伺いました。

日本繁殖生物学会は、昭和 23 年に家畜繁殖研究会として設立された 60 年以上の歴史を有する由緒ある学会です。JRD 誌の 2011 年のインパクトファクターは「1.459」です。前身誌を含め 1955 年からのコンテンツが J-STAGE で公開され、現在投稿審査システムや CrossCheck もご利用になっています。

□　■　□

ーまず、お二人のお役目と学会、学会誌についてご紹介ください。

編集委員長
明治大学教授
長嶋 比呂志 先生

今年度から委員長に就任しました。編集幹事6名と査読審査をしており、最終的な採択判断を担当しています。投稿の半数は海外からのものです。オープンアクセス誌として掲載料を取っています。インターナショナルジャーナルとして、米国の Biology of Reproduction、英国の Reproduction、オーストラリアの Reproduction, Fertility and Development などの各誌と同レベルの内容を誇っています。（長嶋）

私が編集委員会のメンバーになったのはかれこれ 12 年ほど前からで、オンライン化担当の幹事として投稿審査システムの導入と運用を担当しています。（大蔵）

ー電子ジャーナル化への取組みと J-STAGE をご利用になったきっかけ(動機)は何でしょうか。

J-STAGE にオンライン投稿審査システム(当時は独自開発の旧仕様)が導入されるということを聞いて、まずオンライン、PC で論文を読んでもらって、それから投稿審査もオンライン化して、海外からの投稿増や査読期間の短縮をはかろうと考えました。フリーで使えること、また日本発のシステムであることというのが大きな決め手でした。（長嶋・大蔵）

ーJ-STAGE をご利用されていかがでしょうか。また J-STAGE3 がスタートしましたが、良い点・悪い点、あるいはサービスとして期待することは何でしょうか。

副編集委員長
名古屋大学教授
大蔵 聡 先生

J-STAGE に掲載して投稿数が飛躍的に(特に海外から)増えました。新投稿審査システム(SM タイプ利用)では審査期間が大幅に短縮し、また海外のレフェリー探しが容易になったことが良かった点です。CrossCheck も大変良い企画だと思います。
今後改善してほしい点は検索機能です。もっとシンプルになっても良いのではないでしょうか。また、本学会はジャーナルを売って資金にすることは考えていないので販促支援サービスのようなことは必要としていませんが、学会同士の繋がりが増すような取り組みの継続を望みます。コンテンツの網羅性も重要で、日本の学会論文は全て J-STAGE に集まれば良いと思います。（長嶋）

論文を読む「純粋な」ユーザにとって使いやすいシステムであるべきだと思います。たとえば、どんなレベルのユーザでも直感的に使えるユーザインタフェースのような。収録データには、日本で出版されるものが出来るだけ多く登載されることを希望します。要旨集なども、査読者を選ぶ際に、その人がどんな研究をしているのかを調べたりできて結構重宝しています。海外の学会でも、講演要旨が事前にオンライン掲載されることもあると思います。（大蔵）

ー最近の学協会を巡る状勢についてはどのように思われますか。（海外の商業出版社へ移ることについて）

海外の商業主義に組み込まれないようにすべきだと思います。本会は代々の編集委員会の考えで海外商業出版社への移転は一切考えていません。現状で何もデメリットはなく、日本から、フリーで発信することが重要と考えます。国内の論文が「一堂に会する」J-STAGE には、日本全体の底上げを行っていくよう期待します。（長嶋）

日本の学協会は、日本からの情報発信を大切にして、それを「サポート」していくべきだと思います。J-STAGE には、海外の大手商業出版社とは違う独自のシステムとして、日本で出版されているものを世界に発信する機能を強化して行ってほしいです。（大蔵）

ーありがとうございました。使いやすいシステムとなるよう今後とも頑張って参ります。

ご存知ですか!?　JaLC DOI　この秋から付与開始！

これまでJ-STAGE等でご案内させていただいておりましたが、JSTおよび日本国内の情報関連機関（国立国会図書館、国立情報学研究所、物質・材料研究機構）で共同運営しているジャパンリンクセンター（JaLC）がいよいよこの秋から DOI 登録機関（RA）として本格稼働を開始します。これまで試験的にJaLCでのDOI登録を行ってきましたが、RA 機能の追加開発が完了するのに合わせて試行運用から本格運用へと徐々に進めて参ります。J-STAGE では、これまで全ての記事に JOI（JST Object Identifier）を付与し、さらに、CrossRef サービスに参加している学会誌についてはCrossRef DOI（Digital Object Identifier）も代行付与してきました。今後は、CrossRefサービスに参加していない学協会誌（具体的には英語書誌がなくCrossRefに参加できなかった学協会誌等）については、JaLC DOI を登録することになる予定です。DOIシステムは国際規格であるISOとなっており、今回の対応により、J-STAGE 登載論文すべてにDOIが登録され、原文献や引用・被引用文献へのリンクを DOI で行うことができるようになります。これにより、閲覧者がより安心して論文を活用できるようになり、研究者が論文をより容易に引用できることになります。

これまでご利用いただいておりました JOI については、当面継続してコンテンツにたどり着けるようサポートさせていただく予定ですが、JaLC DOIに近い将来移行していくことになります。詳細につきましては、別途学協会の皆様にご案内させていただきます。皆様のご理解、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

インパクトファクタ 2011

今年もトムソン・ロイター社からインパクトファクタ（IF）が公表されました。IFは、Web of Scienceに収録されている雑誌について、その雑誌に掲載されている論文一報あたりの平均被引用回数を示すものです。分野や雑誌の種類等によっても数値の傾向が異なりますが、その雑誌の影響度を測る指標の一つとして広く使われています。今回発表されたのは2011年のIF値で、J-STAGE 登載誌からは2010年から新たに9誌増えて110誌がIFを取得しました。このうち60誌がIF値1以上です。また日本の学協会が発行するジャーナルでは、海外出版社出版分も含めて236誌がIFを取得しており、J-STAGE 登載誌はその約半分を占めています。J-STAGE 登載誌の“IF2011 ベスト5”を以下にご紹介します。

	雑誌名	発行学協会	IF 値
1	Circulation Journal	社団法人　日本循環器学会	3.766
2	Proceedings of the Japan Academy, Series B	日本学士院	2.770
3	Journal of Atherosclerosis and Thrombosis	一般社団法人　日本動脈硬化学会	2.692
4	Journal of the Physical Society of Japan	社団法人　日本物理学会	2.364
5	Drug Metabolism and Pharmacokinetics	日本薬物動態学会	2.321

（カレント登載誌のみ）

編集後記

♪新たにJST電子ジャーナル担当にやってきました。昨今の予算の厳しさもあるとはいえ少ないスタッフで非常に多くの雑誌の出版をサポートしている現状に驚きました。ところで雑誌作りにおいては、和文誌はともかく、英文誌にはまだまだ改善の余地が大きくあると感じています。欧米の雑誌が全てではありませんが、そのスタンダードに沿って雑誌作りをした方が、海外の読者にとって読みやすく受け入れやすいのは事実です。欧米の出版社では標準となっている XML でのデータ作成がいよいよ日本でも本格的に始まりそうです。これを機会に日本の学術雑誌の Quality 向上と日本の研究成果を世界に広めることに少しでも寄与できるよう仕事を進めたいと思います。（Y）

J-STAGE ニュース No. 33　2012 年 9 月 30 日

編集：　独立行政法人 科学技術振興機構（JST）
知識基盤情報部 電子ジャーナル担当
発行人　知識基盤情報部長　大倉　克美
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
電話　03-5214-8837（ダイヤルイン）
E-MAIL　contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE　www.jstage.jst.go.jp

J-STAGE および J-STAGE ニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。
JST 知識基盤情報部　電子ジャーナル担当（contact@jstage. jst. go. jp）

Follow J-STAGE on twitter @jstage_ej